

感情表出偽装経験に関する日中比較研究

○李梦璐・井上弥

(広島大学大学院教育学研究科)

問題・目的

Ekman & Friesen (1969) の提唱した表示規則についての研究 (Matsumoto, 1990; 中村, 1991; 趙, 2002) は、文化比較を通して検討されてきた。しかし、これらの研究は、感じている感情をどの程度表情で表すのかについて検討しているが、感情表出偽装経験については検討されていない。ところで、感情表出偽装経験について検討した井上 (2008) は、日本人大学生を対象として、表情表出の隠蔽および擬態経験を質問紙で尋ねているが、文化差は検討されていない。Matsumoto (1996) は、日本の文化と社会が集団中心と地位の区別の2点を存続させることを重視しており、表示規則がこの2点を人々に周知徹底させていると指摘している。一方、中国の文化も日本と同じように、集団主義と地位の区別を重視しているが、多少違いがある。そのため、本研究は、6つの基本感情の表出偽装経験が異なるかを、日中比較を通して検討することを目的とする。

方法

調査対象者 日本の大学生 75 名 (男 33 名, 女 42 名), 中国の大学生 98 名 (男 48 名, 女 50 名) であった。

質問紙 日本語版は、井上 (2008) の質問紙を参考にし、以下の質問紙を作成した。6つの基本感情 (喜び, 悲しみ, 驚き, 恐れ, 嫌悪, 怒り) について、(1) 隠蔽経験があるか (4件法), その際どんな表情 (a. 無表情, b. 悲しみ, c. 嫌悪, d. 恐れ, e. 喜び, f. 驚き, g. 怒り) を表すか, (2) 擬態経験があるか (4件法), (3) 隠蔽または擬態経験の際の具体的状況 (自由記述) であった。中国語版作成に当たっては、まず日本語版から中国語版へ翻訳し、それから中国語版から日本語版へ翻訳し、翻訳の妥当性を比較検討した。異なる中国人留学生 (N1 満点, 日本語教育または国語教育所属) 通訳協力者 3 人にそれぞれ 1 回翻訳してもらい作成した。

手続き 日本での調査は、授業の時一斉に実施した。中国では、一部は授業の時一斉に実施し、残りの一部は調査協力者の教員に頼んで、授業で一斉に実施し、1週間後回収した。

結果

6つの感情それぞれの抑制経験について、国(2)×性別(2)の2要因分散分析を行なった。国、性別の各感情の抑制経験の平均と分散分析の結果は table 1 に示した通りである。国の有意な主効果は、驚き ($F(1, 169)=7.18, p<.01$), 嫌悪 ($F(1, 169)=4.33, p<.05$) と恐れ ($F(1, 169)=3.43, p<.10$) において見られ、驚きと恐れは中国の得点の方が高く、嫌悪は日本の得点の方が高かった。一方、性の有意な主効果は、驚き ($F(1, 169)=8.14, p<.01$) と喜び ($F(1, 169)=12.77, p<.001$) において見られ、いずれも男の方が女よりも得点が高かった。しかし、国×性の交互作用は見られなかった。

Table 1 日中感情抑制経験平均値(SD)

		驚き	悲しみ	嫌悪	恐れ	喜び	怒り
日本	男性	2.55(1.00)	2.76(0.75)	2.82(0.81)	2.18(0.95)	2.00(1.00)	2.73(0.94)
	女性	1.90(1.01)	2.83(0.79)	2.86(0.87)	1.90(0.85)	1.40(0.80)	2.83(0.88)
中国	男性	2.71(0.87)	2.77(0.81)	2.42(0.94)	2.31(0.99)	2.15(1.13)	2.46(0.94)
	女性	2.52(0.91)	2.82(0.75)	2.70(0.84)	2.30(0.89)	1.68(0.89)	2.78(0.84)
国	日<中**	ns	日>中*	日<中+	ns	ns	
性	男>女**	ns	ns	ns	男>女***	ns	
国×性	ns	ns	ns	ns	ns	ns	

+p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

また、各感情を抑制する時に表出する感情について、性別および男女込みで、国×感情の χ^2 検定を行なった。性別では、全ての感情において有意差は見られなかった。男女込みでは、恐れ ($\chi^2(5)=9.59, p<.10$) において傾向差が見られ、残差分析から、日本は無表情が多く、中国では喜びと驚きが多い傾向がみられた。

考察

本研究では、驚きと恐れは中国の方が抑制し、嫌悪は日本の方が抑制するという国による違いがみられた。また、恐れ隠蔽では、中国人は喜びと驚きを表出し、日本人は無表情を表出するという傾向が見られた。男の方が女よりも驚きと喜び抑制するという共通の特徴もみられたが、類似性の高い日本と中国でも差異があることが明らかになった。今後より詳細な比較研究をする必要があるのではないだろうか。